

収録動画とわせポチを使い、FDプログラムで学んだ教育手法を実現する

川島教授は 2018 年から 2019 年にかけて本学が実施している 3 回の「海外協定校派遣型 FD (Faculty Development) プログラム」に参加した。そこで学んだ教育手法を授業で実践するにあたり、わせポチや Course N@vi、および実際の授業を収録したオンデマンド配信を活用。「やりたかったことを次々と実現できた」と手応えを感じている。



川島 浩平
スポーツ科学学術院 教授



授業冒頭で提示する、授業設計の流れを示すスライド



<講義>のセッションで提示するスライド例



上級プログラムを実施したマカレスター大学のバスケットボールチームと

3 回の FD プログラムで教育の方法論を学び、授業設計に取り入れる

2018 年度 4 月に本学に着任した川島教授は、同年 9 月にクイーンズランド大学（オーストラリア）から招いた講師による FD の初級プログラムに参加したのを皮切りに、2019 年 2 月にはワシントン大学（シアトル）で行われた中級プログラムに、同年 9 月には米国五大湖・中西部私立大学連盟 (GLCA/ACM) のプログラムでマカレスター大学（ミネアポリス）に赴き、上級プログラムにも参加した。

「前任校では 20 年勤め、その間長く管理職としての業務に忙殺され、教育や研究にあまり力を入れられませんでした。自分の授業の方法論はアメリカで 1990 年代に行われていたものであり、その後 ICT を使うなど進化した手法を取り入れた授業を横目に見ながら、なかなか追いつけずにいることにフラストレーションを感じていました」。そんな思いを抱えていたところ、早稲田で教鞭を執る機会を与えられ、この FD プログラムの存在を知り参加を決めたという。

今回アワードの対象となっている「スポーツ人類学」は 2 年次以降の学生向けの科目で、登録履修者が約 170 名という大教室での授業だ。ここで 3 回の FD プログラムから学んだ手法を実践するために考えた授業設計は、毎回の授業を < 復習 > (5 分)、< 既得知識調査 > (15 分)、< 講義および討論 > (60 分)、< 評価 > (10 分) という 4 つのセッションに分割することだった。

復習と既得知識調査にわせポチを活用

まず冒頭に、前回学んだことの理解度や記憶度を学生に尋ねて確認したうえで、要点を再提示する。FD の中級で学んだ「前回の復習をしっかりすることの重要性」を取り入れたこの < 復習 > セクションは、前回欠席した学生だけでなく、出席していたが聞きもらしたり忘れてしまったりした学生にも、その内容を思い出させてリフレッシュする効果があった。

次の < 既得知識調査 > は、その日のテーマに関連する事柄、

人物などについての既得知識の有無や度合いを尋ねる。「まったく知らないのなら真っ白いキャンパスに絵を描くようなものでやりやすいのですが、間違った認識をしている場合には、まずその誤解を解かないと学生が混乱して学習効果が下がってしまうリスクがあります。そのため、そのことについて学生がどのぐらい知っているかをあらかじめ確認することはとても重要です」。

< 復習 > と < 既得知識調査 > は、学生のスマホや PC からオンラインで回答させるわせポチを使用している。「FD の初級で学んだことのひとつが、学生を楽しませて注意をひくためにゲーム的な要素を取り入れるということです。わせポチは、気軽に参加できてその場で回答内容をシェアできる点が良いと思いました」。わせポチの回答方法は選択式と自由記述式のどちらも利用できるが、自由記述式の方がさまざまな意見が見られるため学生には好評だった。「中には多少ふざけたことを書いてくる学生もいますが、学生の生の声がかかるのは良いことだと考えているので、適当に受け流しています」。

回答は匿名で必須ではない。目新しさが減るのか授業回数を重ねるにつれて回答率は減少してくるが、あまり気にしていない。「全員ではなくても、学生の反応が分かるということに大きな意味があります。挙手をさせたらなかなか意見は出てこないですから」。

Course N@vi のレビューシートで、学生の自発的な意見を拾う

続く < 講義 > のセッションは、中身を 3 つのパートに分割。これは FD の中級で学んだ「学生の集中力を考えると 90 分は長すぎる、最大でも 20 分以内に収めるべき」という理論に基づくものだ。「正直本当にそうなのか？とも思いましたが、それを裏付ける統計や論文もたくさんあり、現場の共通認識となっているそうです。そこで、講義にあてる 60 分を 20 分ずつ 3 つに分けることにしました」。

さらに、1 つのパートが終わるタイミングで、学生の意見を聞く時間を 5 分から 10 分ぐらい設けている。「当初はグループに分けてディスカッションをさせたかったのですが、人数が多い

え席を移動しにくいという教室の制約もあり、無駄な時間がかってしまうことから諦めました」。

そこで、わせポチから発言させる方法と、川島教授自身がマイクを持って学生の席に近づき意見を促す方法を併用している。「壇上からずっと話しているのではなく、なるべく学生の中に入っていくのが重要だと学んだからです。また、学生が発言しやすいように、問いかける内容は各自の経験などを尋ねるようなものにしています。ここのノウハウは中級と上級で得たものをうまくブレンドした形です」。

最後の < 評価 > のセッションは、わせポチを使って「授業で一番印象に残った点」「改善してほしい点」について自由記述で回答させる。「これは中級で学んだ手法です。改善点では『黒板に向けてポイントを振り回しすぎると目がチカチカする』など具体的な指摘も出てくるので、気をつけるようにしました」。

さらに、授業終了後には Course N@vi のレビューシートを使って、自由なコメントを書かせる。「自発的に出てくる声を聞きたいので、授業時間内で行っている < 評価 > と違って、定形の質問は用意しません。書いた内容に関わらず、提出すれば 1 点与えることにしています」。

このレビューシートに書かれた学生のコメントへは、必ず一言ずつ返信している。「質問があれば答えるほか、補足的な話を書き添えることもあります。ほとんどは、良い意見には『Great!』とか、『コメントありがとう』など簡単な返信が多いので、大した手間ではありません。人数が多い授業だけに「ここまでしてくれる先生はいなかった」と学生から感謝されることもあるという。「せっかく返したコメントを読まない学生もいるようですが、まあそんなものかなと思っています。参加意欲を削がないためにも、批判がましい返信は一切書かないようにしています」。

授業を収録して動画で公開。試合で欠席する学生や復習に役立てる

もうひとつの試みとして、授業の様子を収録しオンデマンドで公開している。「スポーツ科学部では、試合などの関係で数週間欠席せざるを得ないケースもあります。そこで、授業に出席が叶

わなかった学生へのフォローの意味もあって収録しておくことにしました」。収録や動画の編集作業は基本的に本学が委託している外部スタッフが行い、2 日後には動画が送られてくるので教員の負担はない。「一応先に中身を確認したいので、まず 1 週間は私だけが見られる状態にしておいて、その後学生に公開しています」。実際には、ディスカッション内の自分の発言をカットしてほしいという学生がいたため、その部分は削除した上で公開したことがあったという。

収録した授業の様子を見返すことは、自分自身にもさまざまな気付きがあった。「自分の話し方や表情などの改善点も見つかり、とても勉強になりました。思っていたよりうまく話せていると感じて自信になる点もありましたし、収録を通して客観的に確認できたのはとても良かったと思います。収録していることで最初は少し緊張しましたが、授業に集中するとカメラの存在も忘れて気になりませんでした」。

公開された動画は、欠席した学生だけでなく出席した学生にも復習用に役立っているようだ。「視聴履歴を確認するとけっこう見ているなという印象で、収録した価値があったと感じています」。

そもそも「初めて何かをすることが好き」という川島教授。今回 FD プログラムに参加し、そこで得たノウハウを取り入れた授業を行うという試みの出発点は、「20 年以上同じ方法でやってきたことを何か変えてみたい」という気持ちだった。2018 年度の後期、そして 2019 年度前期、後期とブラッシュアップを重ね、すこしずつ前進していると感じている。「わせポチや授業収録というテクノロジーを導入しながら、早稲田の 3 つの FD プログラムで学んだことを総動員することができました。今となっては、ICT ツールがない時代には戻れないと感じています」。